

それいけ!

新米先生



所見の書き方のポイント

子どもを

しっかりと見つめて

文 | リンリン (ペンネーム)
イラスト | 松井晴美

「ぶつの子なんて…」

「ぶつ過ぎい書へんじがな…」

初めての成績表、そして所見に取り組むとき、やんちゃで手を焼いた子や、しっかり者の子は、書きたいことがすぐに浮かんでくるのに、なかなか書けない子がクラスに数人…。

「子どもたちのことをしっかりと見ていたはずなのに…」

と首を傾げた経験はありませんか？

どんなことを書けばいいのか、どこまでストレートに書いていいのか、私も新米先生の頃には悩んだ経験がたくさんあります。

隣のクラスのベテラン先生に、「いくつになってもこの時期は嫌なものよ」

とか、

「だんだん、コツがつかめてきて、スラスラ書けるようになるわよ」

などと、よく励ましていただきました。

でも実際、所見にはたくさん時間がかかり、成績提出の直前まで悩まされることしばしばありました。成績表は時間を有効に使い、余裕をもって仕上げたいものです。

以下、私が先生方に聞いた所見の書き方のポイントを、いくつかご紹介します。

○細かく記録を取っておくこと！

いくら記憶力が良くても、次から次へと仕事をこなす忙しい日々の中では、記憶はどんどん薄れ、学期末には、印象的な子どもの様子以外は頭に残っていないのが現状です。

しかも、人の見方は、なかなか変わりません。同じような内容を続けて書いてしまうこともあります。

そこで、「これは！」と思う出来事は、必ずメモを取っておくようにするとよいでしょう。

たとえば、漢字や計算などで、飛躍的に成績がアップしたときの様子や、友達に優しい言葉がけをしていたときの様子などを、付せんや名簿に具体的に記録していきます。

その際、後から読んで理解できるように、A B Cの評価ではなく、文章で表現しておくことが大事です。

○行事の後はずき振り返りを

行事での活躍は、特に所見に記入したものです。子どもたちは行事を通して一回りも二回りも大きく成長します。そこで、練習も含めた頑張りの様子を、子どもたちの言葉で短く書かせておくといでしよう。

作文でもよいですが、その場合、後から読み返すのが大変にならないよう気をつけましょう。

子どもたちの記憶が新しいうちに実施することをおすすめします。

○書ける子から書く

所見を書いていくと、すらすらと書ける子となかなか文章化しづらい子がいるものです。書きにくい子は後回しにして、書ける子からどんどん書いていきましょう。名簿の順に進めていくと、書けない子にたくさん時間をかけることとなります。

「所見を書きにくい子がいる」ということは、自分がその子とあまり関わっていません。なかなか良さを見とることができなかったり、なかなか良さを見とることができなかったりしていたということの表れです。2学期から意識的に声をかけたり、一緒に遊んだり、様子を注意深く見るようにしたりすることが大切です。

○具体的に書く

たとえば、「国語では登場人物の気持ちをしっかりと読み取ることができました」などと、子どものようすを大きく見て記入していくと、毎学期同じ内容の所見になってしまいます。

「○○の学習では、どのような力がついたのか」「どんな姿勢で学習に臨んでいたのか」など、具体的に書くようにしましょう。

そのためには、授業ごとに子どもたちの様子を見とり、評価していくことが大事です。

また、プリントやノートは所見の材料の宝庫です。定期的に確認するようにしましょう。

○教師の評価を入れて

「〓した」と事実のみで締めくくる所見は、少し寂しい感じがします。

たとえば、「調べたことを新聞にまとめました」よりも「調べたことを、図やイラストを使って見やすく（わかりやすく）まとめました」や「…新聞にまとめました。読む人のことを考えて詳しい説明を付け加えていて立派です」などの教師の評価が入ると、ぐっと温かさが加わります。

○自分がどのようにしていくかも書く

子どもの成長した点、良い点を中心に書くといっても、中には良いことばかり書けない子もいます。

その際、自分が今後どのように指導していくのかも記入するとよいでしょう。

「忘れ物が目立ちました。2学期は忘れ物がないように頑張りました」
ではなく、
「忘れ物が目立ちました。2学期は忘れ物が少なくなるようにこまめに声かけをしていきます」

とすると、一緒に頑張っていこうとする姿勢が所見から伝わります。

上手な先生から学んで

上手な先生の所見は、読むだけでどの子について書いてあるのかを当てることができます。

また、同じことが書かれていても、表現の違いで、読んだ後の印象が全然違ってきます。

ぜひ、ベテラン先生の所見を読ませていただき、文章から学ばせていただきます。

新米先生もこれから経験を積んでどんどん上手になっていくでしょう。子どもたちをしっかりと見つけて、温かな所見が書けるように、一緒に頑張っていきたいと思います。

